祭神名を名乗る神社は案外、数少ないのかもしれない。

「創建」は一部、新しい資料によったものもある。(伝)は伝承であるが「不詳」と受けとった方が無難である。十世紀までの創建も「不詳」と受けとった方が無難である。

式内・延喜式に列する神社とは、既述のように藤原時平らが醍醐天皇の命で延喜五年（九〇五）編集に着手した五〇巻の法典所載の神社で、式内社であることは、その歴史と格式が明らかであるという意味があるが、明治初年の式内社の索定にあいまいさを否定することができない例も生じたのである。

仏教の復活　神仏分離は時代を画する危機意識の中で逸脱しやすい民心を掌握する壮大な戦略といわれているが、江戸期を通じて民衆の生活の中に根を下ろした仏教（仏教的習俗）は、一片の布告で廃滅できるものではなかった。廃仏棄釈の嵐の中で一時は寺院を捨てた民衆も、江戸期の寺請制が「家」と結びついて定着したこともあって、信教の自由の確立の中で、祖先の祭祀を主とする「宗教性のない習俗化した宗教的行為」に再び結びついていった。

明治十五年、自性院檀徒は一八五戸まで回復したという。

第十章　文化と教育

第一節　豊岡の歌人たち

歌壇概説

江戸時代の中ごろから豊岡町内でも、和歌や俳諧のたいへん盛んな時期を迎える。町家では大石繁道・保田佐世を中心とする歌仲間があり、やや下って南条鷺橋が出た。一方、武士階級でも藩主・京極高品とその母・梅寿院によって家中に歌道が盛んとなり、そうした中から、中央で名をなした前波黙軒が出た。

梅寿院は堂上和歌の第一人者・烏丸光栄に学び、佐世は澄月、鷺橋は伴蒿蹊、黙軒は小沢芦庵と当時、民間で平安和歌四天王（上記三者に慈延を加える）といわれた一流の歌人を師とした。いうなれば豊岡歌壇は筋目の正しいもので、その隆盛期は大体十八世紀後半の寛延期（一七五〇年ごろ）から寛政期（一八〇〇年ころ）の間とみることができる。

同じころ、町家では富商を中心に俳諧も盛んに行なわれ以降、幕末動乱のきざしを見るころまで、町内に文化の花が咲きにおった。

保田佐世と町家の歌人

保田佐世は寛政六年（一七九四）に没したが、豊岡の富商・保田長房（通称・綿屋勘左衛門）の娘で、山本総兵衛の二男・長常を婿に迎えて家を継ぐ。和歌をたしなんだ実母の導きによって、早くから歌に親しみ、長じて京の歌僧・澄月（一七一四～一七九八）に師事し、寛延から天明年間に及ぶ和歌集『長閑集』『認香集』『昨見集』の三書を遺している（書名はいずれも各集の最初の歌によって名づけたもので、長閑集は歌会の記録、他は自家集である）。

佐世は澄月にしばしば歌稿を送って添削指導を受けているが、澄月の七〇歳の賀を祝して、

つもり来し稀の齢の人や見む幾十がへりの松の言の葉

と詠んで贈った返しに澄月は、

「お佐世が歌の道に志して、添削指導を請うようになってから多くの年が経ったが、今我が七〇の齢を祝して、千年までも教えてほしいといってきたので、

『言の葉の道は限りもななそぢの後もやあらばなおしるべせむ』」

と応じ、また佐世が歎くことがあって教えを求めた時「いとまあらばとかく歌に志せよ」と、

言の葉はよろずの憂さの忘れ草つみならでこそ身をばたのしめ

という歌を与えて励ますなど、澄月は歌の道だけでなく、人生の道でも佐世を導いた。

写303　梅寿院（京極高永の室）の詠歌と筆蹟（京極高光氏蔵）

春雨　つれづれと詠（ながめ）くらせる草の庵に志づけさそへて春雨ぞふる

佐世には二男二女があったが、

つとに長女を失い、安永四年には学才があって将来を期待されていた長男・市三郎が二五歳の若さで亡くなった。その一周忌に、

去年の今日煙と消えしおもかげの立ちそふものは霞なりけり

行末を思ひ置しもあだ桜散り残りたる身こそつらけれ

と子に先立たれた憂き心を詠んだが、天明二年には次女・美与が長わずらいの床につき翌三年の正月、短い生涯（十六歳）を閉じた。その前後の憂いや歎きが数々の歌となっている。

娘が床についてから一年たった年の暮に、

今ははや惜しむ間ぞなき一年を物思ひつつあだに暮して

春になれば少しはよくなるかと願って、

かくばかり嵐に氷る　み山井も　春の恵みに解くるをぞ待つ

その願いも空しく、明けて一月八日、遂に帰らぬ客となる。

かねてより思ひおきしも今更に別れになれば心乱るる

しかし、よく考えると娘の死は我がための善知識で、今こそ無常を悟る時だと思われて、

思ふにはかかる歎きを見ざりせば憂世の夢もさめずやあるらん

そして、娘のかたみの鏡を見るにつけて、

朝夕にうつせし影もとどまらで見るに涙のます鏡かも

こうした一連の哀傷の歌を、師の澄月に送ったところ、澄月は「いさむべき言の葉なき中に、強ひて申し送

る」として、次の歌を与えている。

歎くなよ行くは悟りの道しるべ子を思ふ闇に迷ひこし身を

佐世の歌は、前記三集のほか『但馬名所和歌集』にも見えるが、それらの中から題詠五首を掲げる。

打寄する浪もかがやく玉くしげ二見の浦に夕日いさよふ　（二見浦夕照）

庭の面に散りてもしばし見る花を又吹きさそふ春風ぞ憂き　（庭上落花）

置くままに風もみださで朝露を絡ひとめたる青柳の糸　（柳露）

山陰や岩間をつたふ細清水ただ一すじに涼しかりける　（泉辺納涼）

誰が宿も明日の春待ついとなみに年の名残を惜しむひまなき　（家々除夜）

佐世撰『長閑集』は歌仲間の歌会の記録で前半は寛延二年（一七四九）のもの、後半は明記されていないが明和後期（一七七〇ごろ）のもので、その間約二〇年の隔たりがある。従って連中の名もほとんど入替わり、共通の名は佐世と小川満為の二人だけである。『長閑集』『認香集』『昨見集』に見える主な歌人について述べる。

保田妙照は宝暦三年（一七五三）没、俗名不詳。佐世の母で長房の後妻である。妙照は法名であるが、生前から和歌の雅号として用いている。保田家系譜によれば、林村（竹野町林）大部氏の娘で夫の死後約二〇年間、よく婦道を守り家政を処理し、また、よく子女を養育したという。その間、和歌をたしなみ佐世が歌の道に進んだのも、その影響によるものであろう。『昨見集』に佐世の次のような文章がある。

世のことわざ繁きに阻へられ、敷島の道もものうく覚えければ、しばしが程捨て侍りしが、たらちね（母）

の世にありし時「憂き世を渡る心の助けにもなりぬるはこの道なり、絶えず心にかけよ」など言ひ置き給ふことを思ひ出て捨てもやられず、道しるべする人を頼み、又思ひ立ちてなむ。

あぢきなく捨てし心のしるべせよ又たどり見む言の葉の道

そして佐世は、母の十三回忌（明和二年）に追悼の歌二〇首を手向けている。

『長閑集』に見える妙照の作中から三首を掲げる。

山の端はかすみながらも春寒みまだ消えがてに残る白雪　（山残雪）

花染の袂も今日はぬぎ更へて単衣にうつる夏は来にけり　（更衣）

むら雲もおのが羽風に払ふらん月さやかなる天津雁がね　（月前雁）

大石繁道（一七〇五～一七七七）は小田井神社の神官で、町家の歌仲間の初期におけるリーダー格であったと思われる。

怠りの窓には文のひもとかで幾夜をあだに向ふ灯火　（窓前燈）

思はずも風きほひ来てしばし今暑さ忘るる夕立の雨　（夕立風）

花に見し梢も今は若葉にて緑涼しき夏の山の端　（新樹）

なお、繁道には豊岡の風景を詠んだ『豊陵十勝』と『但馬名所和歌』一〇余首があるが、それぞれ二首ずつをあげる。

白鷺の河の洲崎に群れいるは咲く卯の花か浪の寄するか　（中洲白鷺）

置く霜に跡こそ残れ朝まだきゆききを見する前の板橋　（板橋清霜）

海人小舟釣のいとなみ哀れ又結ぶの浦に世を渡るらん　（結浦釣舟）
露時雨千入に染めて唐錦朝来の山の峯のもみぢ葉　（朝来山紅葉）

山本成常（一六九二～一七七四）は通称・惣兵衛、字は太初、謙叟と号した。佐世の夫・長常の父で百拙和尚について参禅し、豪気な気性であったという。後年、還暦のころ一時、京都に仮寓していたようで、佐世が「仰ぐぞよ六十の後は故郷に栄ゆく松の千代の齢を」という歌をおくったことが『認香集』にみえる。

山高み雲より滝の落ちるかと見れば残れる去年の白雪　（山残雪）
世をいとひ文みる人や薄屋の窓にうつろふ夜半の燈　（窓前燈）
此の程の旅のつかれをここに来てしばし忘るる花の下陰　（寄花旅）

山本成明（一七一六～一七六二）は、成常の長子で通称は源蔵、佐世の義兄にあたる。父の隠居により家督を継いで間もなく故あって父の怒りを受け、家を弟に譲って妻子を連れて京都に移り住んだ。成明はその後、妻子を離別して仏門に入り、実恩と名のったが宝暦十二年（一七六二）、彼の地で没した。

春の夜の霞へだつる雲間より山も朧に有明の月　（暁天春月）
いとはじな憂世の外の隠家も花故人の訪ふと思へば　（山家花）

『長閑集』収録の歌会に前後期とも名を連ねているのは、佐世以外に**小川満為**がある。明和五年（一七六八）に古稀（七〇歳）の賀を迎えたことが『認香集』に見えるが経歴は不詳である。

咲きそむる花かとみれば遠かたの山もまだらに残る白雪　（山残雪）
水無月の明け行く空に降る雨は秋立つ今日のしるしなるらん　（新秋雨）

山人も踏み迷ふらし木枯の落葉に埋む道の岩橋　（落葉埋石）

まだあさきうちに訪へかし程もなく降りうづむ雪に道や絶えなん　（依雪待人）

そのほか前記の歌会には柳泉・加代・林女・嶋女・睡花・守雄・風子らの名が見える（いずれも経歴不明。作品省略）。

次に、後期（明和年間）の歌会に名を連ねる主な歌人をあげると、

由利茂政は明和九年（一七七二）に没しているが、丹後・中河氏より入って由利茂賀の婿養子となる。通称・六左衛門、隠居後は百川と称した。

秋来ぬとまだきにそよぐ呉竹の音も一夜に変るむら雨（さめ）　（新秋雨）

奥山の谷の川瀬の岩橋も踏み分けがたき落葉なりけり　（落葉埋石）

降り埋む雪の上にも立つけぶりあらはれなびく峯の炭竈　（峯炭竈）

由利茂績（一七二八～一八一三）は、茂政の三男で、後を継いで六左衛門を称し、可簡または不舎と号した。

さびしさを友と思へば山里の柴の庵は住みよかりけり　（柴門人不到）

いつしかと今朝は身にしむ風の音萩の上葉に秋や来ぬらん　（初秋風）

山人の通ふ桟（かけはし）あやふさも忘れてぞ見る白菊の花　（橋辺菊）

その外に勝龍・苫（とま）女・綾女・好重・猶女などの名が見える。

藩主一門と家中の歌人　藩主・京極氏は代々、学を好み和歌や俳諧をたしなむ人が多かった。中でも高永の夫人・梅寿院は天明元年（一七八一）に没するまで歌道の造詣が深く、その影響で宝暦から天明にかけて一

門家中の間に歌道の盛んなころがあった。

梅寿院は、肥後宇土藩主・細川興生の息女で近世公卿歌人中随一といわれた烏丸光栄（一六八九～一七四八）に学び後、京極宮家仁親王（一七〇三～一七六七）に師事して、その道をきわめ、歌集数巻を遺した（『豊岡誌』）というがまだ見あたらず、写303の一首の他、舟木家文書中の断簡に次の一首をみるだけである。

夕間暮かすむ田の面にしめはえて水口まつる賤が苗代（注連）　（苗　代）

京極高品（一七四一～一七九二）は、高永の長子で宝暦十一年（一七六一）に藩主となる。母は梅寿院、文学を好み和歌をよくした。江戸在府中は大田蜀山人なども出入りしたという。

月ならば老もいとはじ花にはとめづる余りに友やしたはん　（見花忍友）

思ひなき身の程ならば吹く風をうはの空にも聞きて過ぎまし　（寄風恋）

夕月のかげやどるまであら小田をかへすや賤が苗代の水　（苗　代）

京極高大は、高品の異母弟で兄の養子となったが、病身のため退身した。

月見んといひしかごとも小夜更けて松のとぼそに影ぞかたむく（口実）（扉）　（寄月恋）

訪ひよれば袖さへぬれぬふる郷の庭のあさぢが露の夕ぐれ　（故郷庭竹）

ますらをが夕暮かけて引くしめに秋のたのみをまかす苗代　（苗　代）

以下は、侍臣や侍女のものであろう。

安達汎充

音伝てとほるもさびし柴の戸のたそがれ時の軒の松風（おとずれ）　（薄暮松風）

苗代のをりたがへじとますらをが夕暮かけて種や蒔くらん　（苗　代）

延　実

われながら向ふもつらき増鏡うつす姿も面がはりして　（寄鏡恋）

降すまむゆふべの雨にしめはえて長閑にみゆる小田の苗代　（苗　代）

延実には、他に『但馬名所和歌集』に詠歌がみえる。その二首をかかげる。

秋の夜も明けなば月や入佐山まだ中空のかげぞさやけき　（入佐山秋月）

降り積みて晴るる浪間に暮残る夕日も寒き雪の白浜　（白浜暮雪）

立　子

懸けていのる三宝の鏡くもらねど恋しき人は見えぬなりけり　（寄鏡恋）

三　子

濁りなき世にもあるかな夕日かげ霞む山田の苗代の水　（苗　代）

なお、これより先、元禄のころに、国学者で歌人として知られた**京極高門**（一六五八～一七二一）がある。藩主・高直の二男で、はじめ丹後に二〇〇〇石を分領し寄合衆に列したが、兄・高盛が豊岡に移封の際、その采地も但馬に移され寺内村（現・和田山町寺内）に陣屋を置いた。中院也足軒に国学を学び、和歌もよくしたが後年、薙髪して槐老和尚と称した。『曲妙集』『蛙文集』『隅田川歌合』などの著がある（平凡社『人名大辞典』）。

次に、年代ははっきりしないが、藩の重職・舟木氏の息女・重子の『七夕七首』中、三首をあげておく。

舟木重子

波こえぬ秋はあれどもたなばたの積るうらみや末の松山　（七夕山）

鳴く鳥の天つ空ねも七夕の今日逢坂のせきはゆるさじ　（七夕鳥）

たなばたの舟出待つ間の手すさびにかさばやならすねやの扇を　（七夕扇）

都で名をなした前波黙軒

前波黙軒（一七四五～一八一八）は通称を矩輔、名は敬儀。京都の小沢芦庵について歌を修め、芦庵門四天王の一に数えられた。

黙軒は大和・高取藩の重役・中谷氏の出で、幼くして豊岡藩の家老・前波正瞭の養子となった。間もなく養父が亡くなったので、その後を継いだが、その翌年に実子・正任が生まれた。

養母は京都の松岡宗誓の娘で滝子といい、なかなかの烈婦賢母で夫亡き後、よく家を守り、養子と実子を親疎なく立派に養育した。後、黙軒が致仕して京都に居を定めるに及んで、これに従い文化十一年（一八一四）に八〇歳で没した。滝子は教養に富み和歌をよくしたが、黙軒が歌人として名を成したのは、この母に負うところが大きい。黙軒の遺著『蕉雨園集』の中に母親に関する次のような歌文がある（意訳）。

やむを得ぬ事情があって京に母を残したまま、しばらく大和に行っていた間に突然、母が倒れて身動きもできない状態になった。息子が帰るまでは何としても生きたいと、

老が身の命はさらに惜しまねどこのたびばかりしばしとぞ思ふ　滝子

と、苦しい中に思い続けたということを、帰宅後聞かされて無事に回復した母の姿をみるうれしさに、

この度をしのぎて待ちし君なれば千とせの山もやすく越えなむ　黙軒

滝子はなくなる前年、十一月のある夜更け、死を予期してか黙軒を呼び起こして、

老いらくの八十路の年も今しばしもと来し方へいつか帰らむ　　滝子

という歌を示した。その翌月より病に伏し、黙軒の心をこめた孝養の果て、明けて一月十四日の暁方に亡くなった。

そして、野辺の送りをすませて、

いかにせむうちぬ(寝)る夜半の夢ならばまた見ることもあらましものを

いつの世か思ひ忘れむ君を今日野辺の煙となせし悲しさ

と詠み、骨拾いに蓮台野に行く道すがら、

忘られぬ夜半のけぶりの名残りぞと野べの霞をみるもつゆけし

と嘆じている。

黙軒は幼少にして門閥の家を継ぎ、長じて家老職に就いて治績を挙げたが後、職を辞し（寛政の初めころ）隠居身分のまま母を伴って京に住み、歌道に専念した。

寛政十二年・享和三年・文化六年の分限帳に「無格家老年寄分隠居　五人扶持前波木軒」とある。そして、藪内東走の『伊勢紀行』によれば元旦には、伊勢神宮に藩主の代参を勤めたりしている。また、かつて仕えた藩主・高品の七回忌に

七とせの秋としなればひぐらしも昔を恋ふる音をぞ添へける

という追悼の歌を詠んだことが『蕉雨園集』に見える。

黙軒の師事した小沢芦庵（一七二三～一八〇一）は平安四天王の第一に挙げられる歌人で、和歌は自然感情を平易に述べるべきだとして、いわゆる「ただこと歌」を唱導し、ことさらな技巧を排した。黙軒は芦庵門四天王に数えられた高弟で、忠実にこれを受けついだ。人となり誠実謹直で、権貴を求めず、かつて藩の重職についていたような風は少しもなかったという。師の芦庵に寄せる情を示す歌を二、三挙げれば、

小沢の翁を思ひて但馬より

五月雨はいくへか雲に太秦（うずまさ）の里は春さへさびしかりしを

（注・太秦は師の住所）

師の翁の月忌に鵜をよめる

我ことやよる片波に離れ鵜の翅（つばさ）しをれて哭（ね）にはなくらむ

一周忌に懐旧といふことを

しばしだに忘れぬものの今日といへばことにぞ偲ぶ君が昔を

芦庵は晩年、「小坂の宮」とよばれた妙法院宮真仁法親王の和歌の師として宮家に出入していたが、すでに老齢の自分に代わる後継者として黙軒を推挙した。以後、黙軒はしばしば宮に召されて歌を奉ったことが、『蕉雨園集』に見える。

宮より絵といふ御題たまはりしによみ奉る

喜びも憂へも色にみゆる絵は心をいかでうつし分けけむ

神無月朔日（ついたち）、宮、紅葉御覧ぜんとて修学院のわたりにおはします。御供仕まつりて仰せ言にてよめる。

露霜に染めて今日をや待ちつらん色の限りを見するもみぢ葉

妙法院宮は若くして文雅を愛し、当代一流の学者・文人・画家・書家を招いて、時おり風雅の集いを催した。寛政十年（一七九八）には妙法院の管理下にあった方広寺の大仏殿が落雷によって焼失したが、宮はその再建に力を尽くし、志を遂げない間に三八歳で亡くなった。

宮の御墓拝みに参りける路に方広院の跡の荒れたるを見て

昔君思ひやかけしはた薄（すすき）ま萩が藪になし果てんとは

黙軒の家集に『蕉雨園集』（出石神社蔵）があるが、これは晩年の文政元年（一八一八）に門人らの懇請によって集録されたもので、和歌一〇〇〇余首を収めている。その他に『千種の花』『鴨川集』『若菜集』『河藻歌集』『鰒玉集』『清風集』などに、その歌や文が収められている。詠草のいくつかをあげる。

春山の木立かすみて降る雨を花のほころぶ糸かとぞ見る　（春雨）

涼しきは門の水田に影みえて稲葉にすがる螢なりけり　（田家螢）

ひぐらしの鳴く夕かげの草むらにさやかに見ゆる秋の初露　（露）

暁の嵐を寒み夢さめて窓に残れる月を見るかな　（暁月入窓）

城崎の湯あみせむとて下る時に

舟下すゆくへも見えず二見潟明けても暗き浦の秋霧

南条鷺橋と後期の歌人

南条鷺橋（一七六七～一八三四）は通称・二方屋又右衛門、字を思邦といい、錦楼または夜雨庵とも号した。鷺橋は和歌と国文を伴蒿蹊に、俳諧を蝶夢に学び、絵もまたよくした。『文の都豆麗』（出石神社蔵）四巻を遺し、国文一五〇編・和歌約二〇〇首（内長歌六）・俳句約一三〇〇句・俳画二五葉を収めている。

師の伴蒿蹊（一七三三～一八〇六）は国学者で、和歌は平安四天王の一人で、名は信友、閑田子と号した。『文の都豆麗』によれば、鷺橋は享和元年（一八〇一）春、京都旅行の際、蒿蹊をその閑居の旧庵に訪ね、庭には四季の花の絶え間がないと聞き、折から春の花の咲きにおう状景に心うたれて

花の香にうき世の事を忘れけり

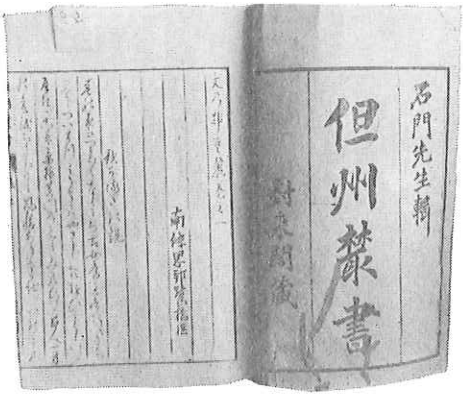
と吟じたところ、蒿蹊がこれにこたえて、

花の香にうき世忘れば月雪のをりふしもまたかく訪ひななむ

と詠じた。それを短冊に書いてもらって宿に帰ったと記している。

それから数年後の文化三年（一八〇六）、蒿蹊の訃報を聞いて、次のように書いている（意訳）。

先年、訪ねた時は、庵の庭の花の盛りであったが、その後、老齢のこととて病がちであられると聞きもう一度、お訪ねしたいと思ひながら家業にしばられて、心にまかせぬ



写304　南条鷺橋作品集『文の都豆麗』（出石神社蔵）

写305　福井謙斎の還暦祝いの軸　由利茂間・茂績や、富・抽蓮などの名が見える。
（栄町・長柄正久氏蔵）

間になくなられたことは心残りである。

都の方を望んで遙かに拝し奉る仰向けば尊き魂やけふの月

また、遺族の悲しみを思いやって

月かげは変らぬ宿の花紅葉いく春秋もかたみとやみむ

鷺橋は人となり謹厚で、かつて『自得の箴』を作り、自らを戒めている。その作歌のいくつかを掲げる。

弟の身まかりける時よめる

我死なば嘆かん人を先立てて絶えぬ涙ぞいとど流るる

行く水にうつらふ花のかげながらむすびてもみむ香に匂ふやと　（水辺花）

朝あらし露吹き払ふ水の面に鰡てふ魚の躍るをぞ見る　（川を下る）

誰が為に粧ひぬらむ女郎花秋野の野辺は人も訪はぬに　（女郎花）

降りつもる雪に往来の道絶えて訪ふ人もなき旅の夕暮　（久美浜宿）

次に、やや下って文化・文政以降の歌人としては、まず文化九年の福井謙斎（東皐）の還暦祝いの賀帳に歌を寄せている人たちがある。

由利茂間（一七四六～一八三八）は通称を良右衛門、茂績の弟で真容軒と号した。謙斎への祝歌は、

治まれる御代にひかれて千世の鶴齢伸ばへて万世や経ん

その友・勝田同好が、古稀の賀に寄せた詩文に

由利真容翁は、天資篤実能く和歌を詠ず。庭前に多く菊を植え、以て自ら娯しむ。平生業に勤め富を致し又よく家を治む。藩侯衣服及び器用を賜ひ以て之を賞す。

とある。九二歳の長寿を得て天保九年（一八三八）に没した。

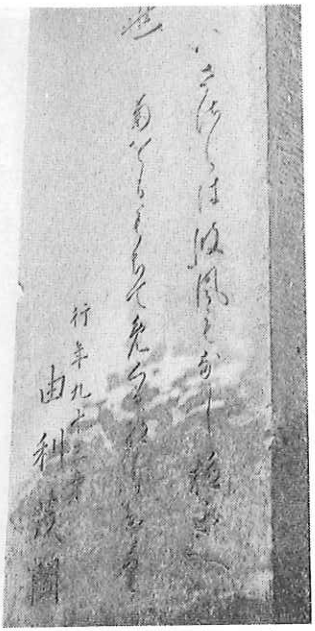
その辞世

いざさらば波風もなし極楽へ菊をも持ちて巡るなりけり　茂間

また妻・富も和歌をよくし、謙斎の賀に

千世までも変らぬ宿の梅が香は六十ぞ花の盛りなりける

の歌を贈っており、その辞世として、



写306　由利茂間の辞世を刻んだ碑　（養源寺墓地）

明日ありと思ふ心のはかなさよ嵐に訪行く峯の紅葉

を残している（『豊岡誌』・『墓碑』による）。

由利予端は、俳句をよくした菊隠の子で、その後を継いで三左衛門を襲名した。歌は謙斎の賀に贈った一首をみるだけである。

葦田鶴の雲居をさして飛ぶ声のいや遠長

写307　田中河内介の短冊（中谷地区・松井一雄氏蔵）

水辺納涼　　かも河のかわ風涼し夏の日の日影なかるる瀬々の白波　　綏猷

福井君の六十の祝ひに

山人の老いせぬ宿の白菊は時もわかなく香にぞ匂へる

成績は年少より学を好み、国史を学んで尊王の志をいだき、やや長じて京に上り、頼山陽・梁川星巌など勤王の大儒と交わって、いよいよその志を深くした。人となり率直恬淡（てんたん）、慷慨（こうがい）の士で平素は読書と作詩にふけり、客あれば酒をくみ詩を吟じて、尊王を論じたという。文化九年（一八一二）に南朝の史蹟をたずねて吉野に遊び、後醍醐帝行在所（あんざいしょ）跡の邸の古竹を請いうけて、横笛を作り、「吉野」と名づけて愛蔵した。これについて、頼山陽の『芳野竹笛歌』・村瀬藤城の『吉野古竹笛引為二奏君紀一』・中田立馨の『題二今井君紀芳野笛一』、その他の讃がある（『豊岡誌』）。

ここでは、広谷の歌人・長沢茂済の歌のみをあげる。

大かたに誰かはきかん吉野てふ名もかぐはしき笛竹のこゑ

なお成績の子・有忠（一八一九～一八六四）は父に似て勤王慷慨の士、京に上って西村敬蔵（八鹿出身の医師で勤王家）方に身を寄せ、旧知の田中河内介をはじめ広く勤王の志士たちと交わった。元治元年（一八六四）には吉田稔麿・宮部鼎蔵らと事を謀り、いわゆる池田屋事件で捕われ、獄中に死亡した。

く世をば経まさむ

今井成績（一七七五～一八四二）は、通称・宮津屋三郎右衛門、字は君紀、麻尼道人と号した勤王家である。時に秦姓を名乗った。

なお香住地区出身の勤王志士・**田中河内介綏猷**（一八一五～一八六二）は、和漢の学を修めて和歌もよくした。勤王の志を述べたものを主に、そのいくつかを挙げる。

御降誕御用を蒙りし時よみ奉る

わが君とわが大君のためなれば骨を粉にして何いとふべき

嘉永五年（一八五二）に河内介の仕える中山大納言家で、明治天皇誕生の時の歌である。「わが君」は主人の中山忠能、「わが大君」は天皇をさす。

次は、安政末年に倒幕運動に身を投ずるに当たり、主家に累を及ぼすのを避けるため、病気にかこつけて致仕した時の歌である。

世の中は浮き沈むとも白河の清き流れに枕して寝む

ついで文久元年（一八六一）に、公武合体派の勢が盛んになり、皇妹・和宮降嫁のきまったころの歌、

かれを聞き是を見るにもことさらに秋は涙の落ちぬ日ぞなき

文久二年（一八六二）春、時勢の挽回を図って大坂へ下る。

ひたすらに唯涙のみ落つるなり我が身ひとりの世の中ならねど

討幕挙兵の事破れて（寺田屋事件）薩摩へ護送される船中の辞世の歌

長らへて変らぬ月を見るよりも死してはらはん世々の浮草

（『豊岡誌』『但馬志士伝』『豊岡出身郷土人物略伝』などによる）。

ほかに、幕末から明治にかけて歌をよくした人に**高木延繁**（一八〇六～一八八八）がある。日吉神社の神官

図67　蝶夢像
（『俳僧蝶夢』より）

で通称は宮内。「和歌の妙諦は古今集にある。和歌に志す者は、朝夕諷誦してその真趣を味わい究めねばならない。これを範とせずして、万葉集の妙も解せないし、近世諸家の歌のよしあしを知ることもできない」として、古今集に傾倒した（『豊岡誌』）。

夕餉たく煙は山の麓にて八十村続く入あいの鐘
菊ならで常盤の松に着綿を着せし程なる今日の初雪
つらかりし多くの年は忘られて今朝立つ春はうれしかりけり

第二節　蝶夢門の俳人たち

蝶夢と豊岡の俳壇

天明復興期から化政期にかけて、全国的に富商を中心に俳諧が盛んであった。豊岡の俳人のほとんどが京都の俳人・蝶夢の門下で、蝶夢没後もその高弟・瓦全（京都）や千影（大津）に師事している。

蝶夢（一七三二～一七九五）は幼くして仏門に入り幻阿といったが、早くから俳諧に志し蝶夢と号した。芭蕉に心酔して蕉風復興の志をいだき、三六歳で寺を法弟に譲った。その後は小庵（五升庵）に閑居し、芭蕉の遺作の収集研究に努めるとともに、諸国を遊歴して蕉風の顕彰に生涯を捧げた。

いわゆる中興期の俳人として蕪村・暁台らと肩を並べる人物であるが、名利を求めない有徳の人柄が一種特

別の尊敬を受け、その風を慕う者は全国に及んだ。本来、仏者である蝶夢は自らは簡素な生活に安んじながら、門弟たちの生活上の相談にのったり、援助を与えたりすることも多かった。

当地の弟子についても、ゆえあって郷里に帰られない髭風を庇護したり、盲目の身の菊隠には真情のこもった慰めや励ましを与えたり、また一時、その膝下にあった木姿を方々に伴って著名な俳人との交友を得させるなど、格別な厚情を受けた者も少なくない。

蝶夢編『類題発句集』『新類題発句集』に句を連ねている豊岡の俳人には右のほか、木卯・東走・鷺橋・柚蓮・南花・曾和・寿衛などがある。来迎寺境内には、東走が蝶夢を追慕して建てた「蝶夢翁墳」の碑がある。

木　卯

蝶夢に従って当地で蕉風復興の先駆をなしたのは、光行寺住職・**木卯**（一七八六没）である。木卯は曾祖父にあたる近江国・明照寺住職・李由（一六六二～一七〇五）が、芭蕉の直門であった縁から早くより俳諧に心を寄せ、蕉風復興に献身する蝶夢を師と仰いだ。木卯は李由が「俳諧は他力のまことにあり」といったのに応じて「発句は小道といへども、亦以て我が願力の教に資するに足る」といっている。町内の俳人髭風・鷺橋・南花・野牛はその檀家である。

蝶夢とは同じ仏者であることからも、心の通い合うものがあったようで、蝶夢の『草根発句集』の中に「但馬の木卯亭にて二見形文台開きに」として

浦風をひらき初める扇かな

写308　蝶夢翁碑（来迎寺）

写309　木卯の短冊（光行寺蔵）

溜るのを待て汲なり岩清水

という句が見える。二見形文台とは、西行を追慕して芭蕉が作った文台を蝶夢が模して作り、木卯がこれにならったのである。

木卯は光行寺二十二世で名を正音、停雲亭とも号し諡（おくりな）を行樹院といい、蝶夢と相似た温雅仁徳の人であった。その没後、後輩の俳人たちによって、『木卯律師発句集』（天明六年）が編まれたが、その序に野牛は、

「（前略）時雨する月の末の六日といふ暁、紫立ちし雲に乗じて、（木意）ほゐの如く往生し給ひぬるに、今更一仏浄土も急がるる心地して、もの悲しくさむしく、行樹院の名のみぞ残れり。かくて来し方を思へば、この辺りにさる風流の中興の師なればとて、人々と共に遺詠を拾ひ、かたの如く小冊に綴り、牌前（はいぜん）に手向け奉り、遠近の友にも見せ（下略）」

と書いている。

その句集は、今は失われているが、『豊岡誌』により、遺吟数句を掲げる。

わが寺の境内はおよそ三百坪ばかり往古より免除の地なれば、

鶯よ堀よりうちは守護不入

みな餅になるべき色や春の草

若竹や猫の掻きたる爪のあと

紅葉や女の細き経の声

思ふこと多きすがたや竹の雪

なお、蝶夢編『類題発句集』（安永三年刊）に、次の三句が収められている。

蛇の泡恐しき覆盆子かな

松のみと思ひし山に初紅葉

海風の一手に来るや冬木立

福井髭風と息・東皐　木卯に次ぐ豊岡俳壇の先達は福井髭風で、髭風を中心に二〇数名が仲間を作り、懐花庵社中といった。

髭風（一七三五～一八〇九）は、通称を丹後屋八郎左衛門、法名を宗周と称し、懐花庵とも号した。豊岡の富商で、酒造業を営み藩の公用を勤めていた。公私の用で京都にはたびたび赴いたようで、早くから蝶夢について俳諧を修めた。安永八年、故あって帰郷をはばかる身となり蝶夢を頼って、その世話で当時、無住であった粟津（大津）の浮巣庵に住んだ。時に四四歳、薙髪して宗周と称した。仮寓七年、蝶夢の膝下にあって俳諧に専念し、句境大いに進んだ。

天明二年には蝶夢と連れ立って、長良川の鵜飼や養老の滝を見物している。天明五年秋に、わび住まいを終えて晴れて家郷に帰ることとなったが、その時に蝶夢から喜びの句を贈られている。

髭風がこの七年ばかり、鳰の浮巣の寄る辺定めぬ仮住まひも、今日や古郷へ帰れるその喜びを言はむに、多くの子に孫にかしづかれて、もろ白髪の老を養ひなんと、その家の酒の名に寄せて

いく世経よ白菊作る宿の奥

家郷に帰った髭風は、すでに隠居の身で、その居を懐花庵と称し、俳諧の道にいそしんで同好者の育成につ

とめた。寛政七年春、還暦の賀を迎えたが、蝶夢は京より寿ぎの句を送ってきている。

懐花亭の年賀あらん日は、あまたの子にうまごの集りて寿ぎ奉られんことを見るやうにして

子いくたりうま子幾人花むしろ

このように師弟の情浅からぬものがあったが、この年の暮に蝶夢は没している。髭風はその後毎年、師の命日の前夜、自庵に親しい句友を招いて、迨夜を営んでいる。蝶夢没後十年目の文化元年の記事によれば、髭風は句友・棠斎を誘って、亡師ゆかりの衣塚（詳細不明）に詣で、墓を清め花を供えて、

掃きよせて木の葉寒けし衣塚

と吟じ、棠斎を伴って自庵に帰り、来合わせた柚蓮を加えて、亡師の肖像をかかげて法事を修した。その後で連句を催し、師の好物であった赤豆粥に餅を入れた夜食を喫したと書いて、その時の連句の一部をのせている。

うしろから照る月寒し衣塚　　棠斎
心の雪の積る夜すがら　　髭風
一折の花は十年の心ばせ　　柚蓮
（下略）

死後、十年にしてなお慕情の厚きを知ることができる。

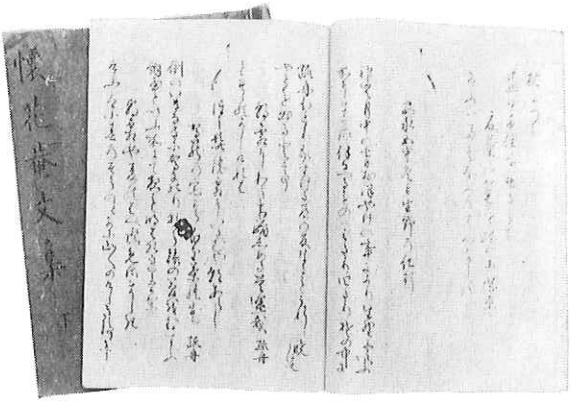
この年の春、髭風は古稀の賀筵を催しているが、その際かつて交わりのあった多くの著名な俳人歌人たち（伴蒿蹊・大江丸・井上重厚・井口菊二・柏原瓦全・福田五来ら）から賀詞を寄せられている。そして自らは、次のような喜びの句を遺している。

耳もよく目もよく生きて稀の春

月雪に馴れて老木の柳かな

家族たち（妻・子・嫁・孫・姪など）もそれぞれに寿ぎの句を作り、まさに俳諧一家の主として幸せな晩年を送って、文化六年二月に七五歳で没した。

髭風には、『懐花庵文集・下』（上は欠）・『懐花庵拾遺文集』・『懐花庵享和三年歳句帖』（以上、豊中市・八木忠雄氏蔵）があり、他に息・東皐撰の追善句集『ふたさと集』があったという。それらの中から若干抄出する。



写310　福井髭風の作品集『懐花庵文集』（豊中市・八木忠雄氏蔵）

亡妻（先妻）を悼む辞（明和九年）より

ものいへば膝へ涙のしぐれかな

移り行く歎きの数や冬至梅

たたんだる夜着そのままや冬籠（ごもり）

江戸紀行（安永四年）より

脚（あし）もとに鼎（かなえ）のかかる花見かな　（仁和寺茶店）

春雨や富士は見えねど茶の匂い　（富士見茶屋）

遅く漕げ岸より上は花茨（いばら）　（深川）

日光山紀行（安永四年）より

今日こそは我も青葉の日に向かふ（江戸出立）

まばらなる加茂の家居や羽抜鶏（ぬけどり）　（加茂の在所）

松杉の影ばかりなりかんこ鳥（参詣の道）

歳句帖（享和三年）より

親竹にもたれて細し今年竹

六月（みなづき）や雲もとどめず但馬富士

茶の花を折るべからずと尼の筆

『類題発句集』ほか、中央の句集に選ばれている俳句の中から、

寝た門（かど）を憎しとこぞる踊かな（『新類題発句集』）

谷川の幅広々と夕がすみ　（几董編『明烏』）

わが秋や庵ひとつの蔦（つた）紅葉　（奇倒編『西国七部集』）

行く春や桜のもとの捨箒　（玉屑編『うら扇』）

後妻の恒（つね）も俳句をよくした。前記『歳句帖』の中から数首を掲げる。

春雨や夜更けて低き話し声

月かげに切れば露ありけしの花

ささ濁る川は卯の花くだしかな

うたた寝の姿も見えて青すだれ

寒月や軒は干し菜の影ぼうし

長男の東皐（とうこう）（一七五二～一八三一）は家業をついで八郎左衛門を襲名したが、本名は璉・字を伯瑚・謙斎と

も号した。晩年は法名の宗甫をも用いた。俳諧のほかに漢詩もよくし、俳諧には東皐、漢詩には謙斎の号を用いている。また、石門心学に傾倒して「含章舎」の設立に尽力した。父・髭風の追善句集『ふたさと集』を編んだというが、未見である。『懐花庵享和三年歳句帖』のほか、文政三年春の『京都紀行』（八木忠雄氏蔵）、書名不明の刊本発句集断簡にその作が見られる。なお、文化九年の還暦の賀に知友から贈られた和歌や俳句を書いた一軸（長柄正久氏蔵）がある。

その『京都紀行』によれば、六六歳の文化三年に妻・須磨を伴って京都に旅しているが、本願寺参詣と商用の合間に、蝶夢の住んでいた泊庵を尋ねたり、心学者の石田梅巖・手嶋堵庵（とあん）・上島淇水（きすい）の墓に詣でたり、また、俳諧の師友・柏原瓦全（五升庵二世）や三井寺円満院の千影らを訪ねて、十年来の久闊（かつ）を叙している。その中から、俳諧に関するものを幾つか抄出する。

二月三十日には、多年念願の嵐山の桜花をみて本望をとげ

命なり嵐の山の花盛り

続いて釈迦堂の栴檀（せんだん）の本尊を拝して

栴檀の匂うつしてや八重桜

翌三月一日には雨の嵐山を見返って

めでたきもあはれや今日は雨の花

ついで広隆寺太子堂に、聖徳太子千二百年遠忌の御開帳を拝して

ありがたや涙は春の雨よりも

三月十二日には、大津・義仲寺（芭蕉墓所）で催された千影社中の月例句会に出席、芭蕉堂を礼拝後、千影宅に泊って歓待を受け、義仲寺庵主・関斎を加えて即吟連句を試みて二泊して帰っている。

その他、前記句集の中より数句を掲げる。

卯の花や雪に崩れし垣のまま
鈴虫や右と左へころぶ声
待宵や宇治伝来の茶の匂ひ
煮直して芋に味あり十七夜
若かへり梅が香うつる朝ぼらけ（還暦）

東皐の妻・須磨、娘・千久も俳句をたしなんだ。

花最中色様々や裾模様　須磨
七草を生野の里にはやしけり　〃
紅梅のつぼみ数へて冬籠　千久
煤はきやたのふだ人の黒き厨　〃

懐花庵社中の俳人たち

南条鷺橋（一七六七～一八三四）の家集『文の都豆麗』には、和歌・文章のほか、俳句約一三〇〇を収め、社中では髭風につぐ有力者である。俳諧の師・蝶夢に寄せる慕情も、和歌の師・伴蒿蹊に寄せる情に劣らないものがある。

蝶夢没後、その墓参を思いながら果たさず、三年を過ぎたある日（寛政十年）、肖像をまつって次の句を作っ

ている。

今日になりて捧ぐる藤の花長し

享和元年（一八〇一）春、ようやく念願を達して京に上り、蝶夢の後継者・五升庵二世の柏原瓦全を誘って亡師の旧居を訪ね、面影残る床の一軸に香華を供えて、

捧ぐるもはや七とせの遅桜

と吟じている。また、この年の秋には自庵に社中の句友を招き、亡師の遺吟の一軸を掲げて七回忌の追善供養を行なっている。

仕ふまつる色は変らじ松の月

次に身内の死に関わるものをいくつか掲げる。

弟のみまかりし後の思ひ

我が影をそれと思ひて夏の月

はらからの百ヶ日に盆踊りを見て

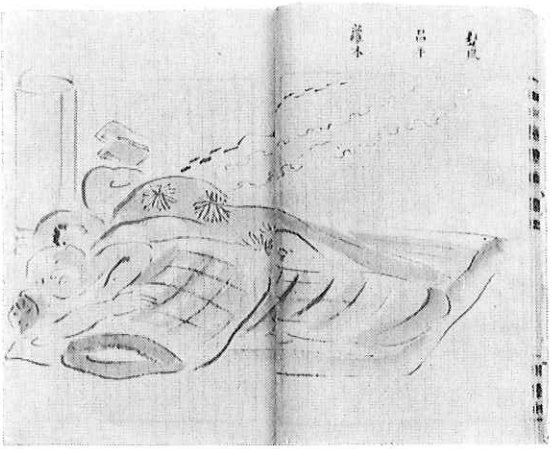
似た影のまた通りたる踊かな

父のみまかり給ふ悲しみの詞

この世界くらき思ひや五月雨

後の母のみまかり給ふ折のことば

その息のつもらば清し六つの花



写311　南条鶯橋の俳画
やうやくに鮃（いびき）は止みて浜千鳥（『日間の浦紀行』より）

なお、俳諧紀行として『文の都豆麗』の中に豊岡や丹後の俳人と同行した『日間の浦（現在の小天橋）紀行』、蓮如上人三百回忌法要を機とした『京都紀行』があり、『舟木家文書』の中に藩主の江戸出府に従った『東国紀行』などがある。

鷺橋は蝶夢や髭風の没後も、同門の京都や大津の俳人瓦全・五来・千影・甫尺・祐昌などと親交を続けているが、自家集・歳句帖や中央の句集に収められているものの中からいくつかを掲げる。

へか〳〵と飛ぶやなずなの薄氷（家集『文の都豆麗』）

白魚の水に放せば水の色　（　同　）
唐門の内にそびえる新樹かな　（　同　）
打水につれて落ちたる一葉かな（　同　）
油尽きて机押しやる夜寒かな　（　同　）
行く年や五つと十になる子供　（　同　）
夜の梅にほひをしぼる雫かな　（几董編『続一夜松後集』）
蝌蚪（かえると）や吹き寄る水の泡と見え　（蝶夢編『新類題発句集』）
行く雁や来た夜は月の赤かりし（　同　）
綿打ちや紙帳にこもる火の明り（　同　）

保田南花（一七六三～一八一六）は歌をよくした佐世の子で、名は長明、字（あざな）を左丘といい少壮、眼を病んで遂に失明に至ったが天資慧敏、よく家運をおとさなかったという。興国寺ゆかりの画僧・百拙和尚の隠室だっ

た南花軒を伯父・山本太初から譲られたことから、南花（南華）と号した。享和二年、不便な奥地にあった南花軒を川辺に移してから、源頼光の蓼川の古歌にちなんで、蓼舟と改めた。社中の例会を時々、南花軒で催している。

鬼灯（ほおずき）や破りて見れば風もなき　（蝶夢編『新類題発句集』）
花の跡訪へば匂ふや青山椒　（　　同　　）
提げ行けば人皆よける牡丹かな　（義仲寺奉扇会）
花びらに夕日を抱いて牡丹かな　（『懐花庵歳句帖』）
初雪や雨のまじるぞ恨なる　（魚潜編『花塚集』）

由利柚蓮（ゆれん）（由璉）（生没年不明）は、通称を太造、名は茂潜、字（あざな）は子龍といい、その宅を無能居と称した。漢詩や書もよくし、特に俳諧に長じていた。後年に淡庵と号し、老境近い文化初年に医業を修め、薙髪して南畝と改めた。由利茂績や茂間の甥にあたる。遺作は多くは伝わっていない。

日にむせて菜の花甘く匂ひけり　（蝶夢編『新類題発句集』）
きりぎりす面白うなる夜は涙　（　　同　　）
月こよひ仏洗はん水の色　（　　同　　）
口すすぎ人に逢ひけり薬喰ひ　（　　同　　）
陽炎（かげろう）や扇に写す雨の山　（『懐花庵歳句帖』）
蚊帳（かや）ごしに話す相手は寝入りけり　（　　同　　）

なお、柚蓮は次の明庵の遺句集『むかし人』の序文を書いている。

明庵（姓氏不明）は、別号・湖坊、失明してなお、句作に精進した人で、家集『むかし人』を遺したというが見当たらず、わずかに柚蓮の手になる序文によって、その境涯をうかがい得るのみである（『豊岡誌』）。

花に鶯、水に住む蛙の声をも心にしめて、心の色を真直（ますぐ）に発句（ほっく）となして己を楽しみしは、明庵のぬし湖坊ならんや。この坊、過ぎし年より眼識を失ひて、春の雨のつれづれの日は芳野の奥を枕の夢にさまよひ、秋の暮のあはれなる夕辺は嵯峨の野末を柱にもたれてしのび、鳥のなく、月曇り、雪の降りなん景色をも、人に尋ね問ひて、折節ごとに案じ得たる発句を、洛の五升庵の老師（蝶夢）に見せ参らするに、もとより筆とる事のならざれば、予の筆をやとひて書かしむるに、ここら多くの年月を経たれば、その発句帳かくばかりに成りぬ。さる四年前の春身まかりて、ただ空しき明庵の名をとどめて、その帳のみ残れり。それを見る人々のみるにたえて板にえ（彫）り、長く見て思ひ出でんといふに、その帳の端に、事の起りを在りし世の如く予に書けよといふに、無能居の窓下に由璉書。

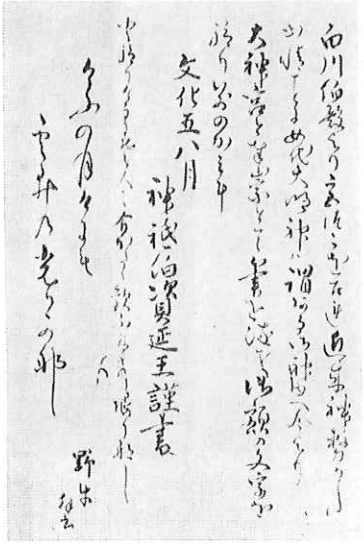
明庵の発句は次の三句を得るだけである。

一生を啼きくらしたか蟬のから
秋立つや草紙（そうし）を虫のありく音
長閑さやかげも動かぬ沖の島

野牛（経歴不詳）は、いろいろな資料から察すると若年よりこの道を修め、木卯・髭風ら先人に育てられてその後をうけ、化政期俳壇の中心的人物であったと思われるが、姓氏も生没年も明らかでない。遺句集『秋の声』の序文（筆者不明）により、その境涯の一端を知ることができる。

野牛老は、いとけなきより俳諧の十七字を学び、或は謡曲の一節を好みて、その二つの遊びは世に許さるる名手なりけるが、いまはの夕べまでも、手を打ちたたき謡ひて、悩むことなくて目ふさぎぬ。年ごろ好きける道とてあはれなりけり。近き年より病うちに深く、後生の事を思ひ、迎誉上人に易行の要道を承り、家の業は猶子に譲り、身は一桃舎にかくれて、肱を枕にして静かに残齢を養ひける（『豊岡誌』）。

野牛が、天明六年（一七八六）に自分の菩提所の光行寺住職・木卯の遺吟を集めてその発句集を編み、その序文を書いていることは前に述べた。降って文化五年（一八〇八）、女代神社奉納額の文字を神祇伯資延王より下賜された時、奉敬文を草して、その末尾に次の句を遺している（『女代神社文書』）。



写312　野牛が女代神社に大明神号拝領を祝って贈った奉敬文の末尾（女代神社蔵）

社の人々ありがたく歓ぶこと限なし

けふの月げにも雲井の光りかな　野牛拝書

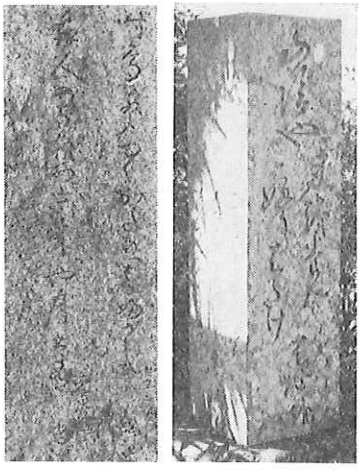
続いて翌文化六年には、木内の瑞峰寺境内に芭蕉句碑を建立し、裏面に自らの句も刻んでいる。

〈正面〉山陰や身を養ふりはたけ　はせを

（ふりは瓜の古名。はせをは芭蕉。この句は『笈日記』所載）

〈裏面〉時鳥声ゆくかたの闇ふかし

トヨオか野牛



写313　野牛らが建立した芭蕉の句碑　左は、その裏面で野牛らの句が刻まれている。（瑞峰寺）

我人のなれぬ未来や月は有　雪中庵下志明

両側面には、但馬各地の俳人六名の句が刻まれている。思うに江戸の雪中庵（四世・大島完来）門下の志明を迎えた機会に、野牛が中心となって建てたのであろう。

種々の句集の中から、数句を掲げる。

難波津の初荷着きけり梅の花　（奇淵編『西国七部集蓬路』）

風止んでただ日の暮るる四月かな（　　同　　）

寝るのみの夜と思ひしに初時雨（　　同　　）

行水のここによどみて杜若（かきつばた）（『懐花庵歳句帖』）

稲妻や乗合舟の人の顔（家集『秋の声』）

枯芦や月にすかして猶寒し（　　同　　）

窓に耳寄せて聞かばや夜半の雪（　　同　　）

涅槃（ねはん）会や梅ふり雪の花も降る（魚潜編『花塚集』）

その他、『懐花庵歳句帖』に名を連ねる社中同人には次のような人たちがある（いずれも経歴不明。作品省略）。隅山木処・窪嵐・松堂・木二・麦舎・枝鳩（香住）・滝花・白琦・竜台・釣水・春翠・方行・子通・椿寿・

杉溪・華蕉・蛙眠・二石・二春・野草・可彳・穂雪・柯松・乙男・此女・みの女など。

なお、このころの俳諧の会は「〇〇興行」と称して、一巻の連句（俳諧の連歌）を構成するのが主体であった。その第一句を発句といい、それが独立して俳句（当時はこれも発句といった）となるのであるが、俳句は連句の余興であったわけである。『懐花庵歳句帖』より一例をあげる。

八月十五日　南花軒興行　「無月」

なきかげも照るや心の月今宵　蓼舟（南花）
　窓面白き十五夜の雨　柚蓮
蟷螂の斧をかまへて動くなり　野牛
　鋸屑をかくすさむしろ　松堂
たま〳〵に女房の親の音信れて　髭風
　はや松前に舟あしのつく　麦舎
等閑に昼の水鶏の啼きつづけ　如幻（峰山の人）
　薬休めば気も軽うなる　野牛
婚礼の日取り近づく台のもの　鷺橋
　切り散らしたる檀紙四五枚　風
雪深き庵りの扉住みあれて　蓮
　しげる尾花もかれ〳〵の月　牛

（下略）

失明の俳人・由利菊隠

由利菊隠（一七四一～一七九八）は通称を三左衛門、幼名は友三郎といい、宵田町の富商の家に生まれたが、四歳で父を失い家督を継ぐ。六歳の時に重患にかかって失明の身となった。その上、二三歳の時には頼りにしていた弟を失い、二五歳で妻（先妻）に先立たれ、その三年後には子を亡くすなど、相次いで近親を失った。加えて病弱で十分に家務を見ることができず、家運も傾きかけたところに親戚との間に争いまで生じて、いよいよ心身を労する状況であった。そうした境涯の中で翻然、俳諧に志し、後半生はもっぱらこの道に生きがいを求めて心を慰めた。

菊隠は、天明六年（四三歳）に『美知濃記』という一編の文章を書いているが、それによって心境をうかがってみる（明治三十五年九月発行『木兎』誌による。意訳）。

「予はおろかにも仮初めのこの世を深く固く思ひ、名利のために病をもうけ四十余り過ぎこし方のくやしさ、又この行末もかく果てなんことの口惜しくおぼえ」俳諧の道に志し、どうにでもして京の五升庵に行って師の蝶夢と語り合ったならば、迷いの雲も吹き払われて「真如の月の光も出でなんものを」と急に思い立って、ひそかに執筆の供を一人だけ連れて京へ旅立った。大渡し（京口）の舟に乗ると、「前途三千里の思ひ」という芭蕉の言葉を思い合せて涙がこぼれた。わが家の方をふり返ってもの思いに沈んでいる折しも、北へ帰る雁がなき渡るのを聞いて、

雁も宿恋しくなりて帰るかや

と、口ずさむほどに舟は対岸に着いた。

しばらく歩いて行くと、若草が足にもつれて、目の見えぬ自分にもあたりが晴れやかに感じられたので、

妻子連れてこの春の野に出でばやな

と吟じ、なお行くほどに連れの人びとが左に見えるのが三開山だと言い合っているのを聞く。ここから駕籠をやとって江本村・伏村を過ぎ、やがて清冷寺村に着き、寺（東楽寺）に入って旅路の無事を祈る。

奇特あれこの世の望みほととぎす

この寺に滞留中の俳友・簣功（きこう）と別れの盃をかわす。簣功は播州の聖（ひじり）で、去年の秋から風雅の友となり、喜びも悲しみもかくさず語り合う仲である。この度の思い立ちは、妻子や妾・すゑなどが聞けば、とうてい承知すまいと思ったので、播州に帰るこの聖を送りに行くのだからとなだめすかして出てきた。思えば、貴い聖をいつわりの種にしたことが恐ろしい。

恥づかしや狐になりて木下闇（こしたやみ）

簣功に別れを告げ本道に出て嶋・水上・長砂各村を経て出石城下に入った。城のあたりで鉄砲の音がしきりに聞こえてきたので胸苦しくなり、持病が起こって苦しんだ。

野に死なば花摘む僧をたのむべし

病弱の上に盲目の身で山坂を越える京への旅は、まこと死を覚悟しての道中だったであろう。寺坂村のあたりで晩春の日も暮れてしまったが、宿貸す家もない。三日月のおぼつかない光を頼りに、矢根村まで行ってやっと一夜の宿を求めた。

ところが、その翌朝、妻子や叔父の方から迎えの人が大勢やってきて、強くひきとめるので、

心なや囀るばかり行々子　（注・行々子はよしきりの別名）

と抵抗してみるものの年来、親代わりに頼ってきた叔父の言にそむけば不幸になるだろうと思う反面、加茂川の水の味も知らずに果てることも残念である。

夏草やもうこの道は通るまじ

こうして引返す決心はしたが、さまざまな事が思い出されて、

楽しむや水のぼうふら枝の蟬

と世の人をうらやむ心にもなり、「いかでかかるもの憂き世の中には生れ来らんと涙をぬぐふ今は、もの思ひ忘るるはこのものに過ぎじ」と道中、酒を飲み続けて「ただ夢のやうになりて」倒れ臥した。明け方になって酔いがさめ、うつつ心になって妻戸をおしあげ「籠の鳥の雲を呼ぶ思ひもかくやらん」と都の方を向いて、

いつまでか老鶯の籠住まひ

『美知濃記』（道の記）はここで終わっているが、その悲痛な心情を察することができる。後、蝶夢はこの小編に奥書を与え、その中で「洛（京）とて別に変りし事なし、盲人の身として四十里の山川をわたり、家郷の妻子を思ひに沈ましむるは決して可ならず」と、失意の菊隠を慰め諭している。そして翌天明七年正月には盲目の身を思いやって、由緒ある香を贈っている。

加茂の古木なりとて「注連の内」といへる香を師のもとより遣り給はりしを或夜題となんし侍る

此の香や火鉢きよめて音きかん　　すゑ

千早振るそのゆかしさを冬籠　　菊隠

その後、寛政二年には二人の男子が同時に元服と角入の儀をあげて喜び、寛政四年春には娘の初節句を祝って、「雛のやうに並んで見せん永らへば」と詠むなど一時、心の平安を得ていたが、それから間もなく身のまわりの世話をしていた妾・すゑが病没する。

病中

半死の気でみる彼岸桜かな　　すゑ

すゑの彼岸桜の句に胸さわぎして　　我捨てて独り行く気か花のつれ　　菊隠

辞世

打払ひ行くや此の世の花の塵（ちり）　　すゑ

頼りにしていたすゑが息をひきとると、菊隠はその遺骸にとりすがって慟哭（こく）した。そして、すゑに寄せる慕情は時を経ても衰えず、忌日忌日には手厚い供養を怠らなかった。すゑの死は彼の心に大き痛手を与え、以後いっそう心身の衰弱を加え、やがて中風にかかって病床に呻吟（しんぎん）すること五年、寛政十年に五七年の苦闘の生涯を閉じた。

菊隠には、『菊隠句集』（稿本）があり、二〇〇〇余句を収めていたというが、俳句を唯一の慰めとしていたことがうなづける。次に、蝶夢編『新類題発句集』に選ばれた句を掲げる。

永き日やひとり米搗く臼の音

水飯に気味よき箸の雫（しずく）かな

写314　辞世を刻んだ由利錦水の墓
（養源寺墓地）

月かけて人音信（おとない）ぬ土用見舞
思ふ人についてまはりし踊かな
名月や野守に問へば夜明前

後妻・**そわ**（一七五二～一八三七）、妾・すゑ（寛政四年没）も俳句をよくし、特にすゑは句集一巻（句数二〇〇〇余）を遺したという。以下、『新類題発句集』に収録されている両人の作をあげる。

出代りに前の名呼ぶや二三日　そわ
行く年や行燈（あんど）につもる針の跡　〃
ながめ〳〵雨戸さしけり冬の月　〃
さびしさやおこらんとする炭の音　〃
その色を心にも持て唐がらし　〃
花咲けばこそ口なしの人も見れ　すゑ
歩きもて酒飲む花見ごころかな　〃
湯の中や菖蒲引き合ふ兄弟　〃
皮落ちて竹涼しげになりにけり　〃

縫物の膝にもつるる暑さかな　〃　〃

川社神も仮家の住居かな　〃

なお、菊隠の三男・**錦水**（寛政十一年没・二五歳）も俳句をよくしたというが、遺吟はほとんど伝わらず墓碑の辞世をみるのみである。

辞世

さまでなき風に散るのか桐一葉　錦水

藪内東走と木姿　東走・木姿とも、いずれも蝶夢門下の有力な俳人で、髭風らとは別に社中をかまえていたように思われる。

藪内東走（一七六二～一八二六）は、通称を中瀬屋五良右衛門、家業は穀物商に兼ねて水運を営む。少壮、京都に出て俳諧を蝶夢に学び、「木つつきやそれは花咲く桜の木」（『新類題発句集』）が、五升庵社中で激賞され評判を高めたという。

蝶夢が没して三年目の寛政十年、来迎寺境内に『蝶夢翁墳』を建立した。

東走は文を好み書をよくし、家業の暇に近隣の児童を集めて読み書きを教えた。藪内家墓碑中に「文政五年仲夏上旬石碑一区施主因葉坊社中」とあるが、因葉坊とは東走の別号ではないかと推測される。後年、家業を譲ってからは諸国を遊歴して、『伊勢詣』『叡山紀行』『東海紀行』などの俳諧紀行文を遺したというが、今は見当たらない（『豊岡誌』）。

『伊勢詣』は藩主の代参に立つ前波黙軒（隠居身分で京都在住）に誘われて、伊勢詣をした年末年始数日間

の紀行である。大晦日以降の記事を抄録する。「宮後神主」とは、京極家の家別けの師職である。

晦日、宮川を越ゆるに

代垢離に水かけられて飛ぶ千鳥

午時、宮後神主の館に着きて、やがて両宮に社参ありけるに共にぬかづきて

行く年や内外の山に群れる人

暮時より神主の館にて、領主武運長久の神楽ありけるを拝聴して

霜積や巫女の上着の古錦

丑刻に年の夜の神事あり。内院に通り給ふ代参の君のあとにつきて、礼拝し奉って

かかる闇の代を思へとや風氷る

卯の刻近く下山ありて元日の式ありけるに

五十過ぎて伊勢の雑煮を祝ひけり

帰途、前波君は東武に赴き給ふ。津の端にて別れて同じ道をあとにし

春立ちていよ〳〵長し瀬田の橋

なお、藪内家から姻戚の利田家に伝わる東走の遺墨に次の句がある。

都のたよりに福寿草をもらひければ

生まれ子といざ見くらべん福寿草

たくましき治郎を得たる年の暮　　東走拝書

終わりに、『新類題発句集』『明烏』など、中央の句集に収められた東走の遺吟をあげる。

丸盆に動き出したる桑子かな　（蝶夢編『新類題発句集』）
望月の玉とやいはん万年青の実（　同　）
初時雨麦の芽を切る朝かな　（　同　）
あだし野や露を命の草の花　（　同　）
菜の花の一反ばかり盛りかな　（几　董　編『明　烏』）

東走の子・**先発**（生没年不詳）は、名は長平、長じて五良右衛門を称し、蝶夢の高弟・柏原瓦全（一七四四～一八二五）に俳諧を学んだ。利田家に遺る短冊に、

かさね〳〵ふる時雨かな音聞て　　瓦全

というのがあるが、先発に何か災が続いた時の見舞に贈られた句だと伝えられている。なお文化九年、福井東皐（謙斎）の六〇歳の賀に贈った句が遺っている。

福井東皐君の耳順の賀を祝し奉りて　　先発

寿の恵と高し春の山

『豊岡誌』によって遺吟数首を掲げる。

横雲や三開山のあけの月
城の月松より外の友もなし
摂河泉一目に城の月見かな

おしわけて墳たづね見ん枯尾花
　残る香の山路にふかし菊の花

木姿（寛政十一年没）は通称を六兵衛、姓と屋号は不明。『蝶夢と落柿舎』（高木蒼梧）の中の蝶夢年譜によれば、

天明六年十一月一日、蝶夢主催の木姿送別俳諧興行が蝶夢の住庵で催され、高井几董・高桑闌更・松岡青蘿・勝見二柳・久村暁台・井上重厚その他、錚々たる俳人が列席している。

天明七年四月十二日、蝶夢は義仲寺奉扇会の帰途に青蘿・木姿その他を連れて、石山・笠取山・醍醐へと吟行を試みている。

天明八年二月二十六日から五月七日まで、蝶夢は木姿を伴って、甲州路から東国に俳諧行脚に赴き、江戸では大島完来・加舎白雄・橋本泰里・夏目成美ら高名な諸家と唱和した。後日、蝶夢は『裏富士紀行』、木姿は『富士見行脚』（未見）を著わした。

これをみると木姿は一時、蝶夢のもとにあって格別懇意に交情を受けたことが分かる。なお『俳人蝶夢』（安田清）によれば、ほかに『木姿随筆』を遺しているという。

また、南条鷺橋の『京都紀行』（享和元年）の中に次のような一節がある。

連れだちし同行の中に、故人木姿と呼ばれし男の末の子なる林助といへるありて、形見の短刀を腰に横たへし面影の親子とてよく似たるに、なつかしく思ひ出されけるに、明日や三とせの忌日なりといふに、

眼にふれし花を手向けむ旅の宿　　鷺橋

『新類題発句集』及び『富士見行脚』の中より、遺吟の一部を掲げる。

涅槃像一重蒲団を召させばや（蝶夢編『新類題発句集』）

黄鳥や人は餅食ふ朝こと　（　　同　　）

逢坂の関に出てこそ初桜　（『富　士　見　行　脚』）

菜の花にあたりまばゆし鏡山（　　同　　）

蝶とともに我も昼寝や草筵（　　同　　）

前記『俳人蝶夢』に、「木姿は晩年孤舟と改号す」とあるが、『懐花庵拾遺文集』中の『生野紀行』（安永五年）に**孤舟**という俳人が出ている。木姿と同一人とすれば、この時期は晩年とはいえない。『生野紀行』の孤舟は次に見るように、かなり俳諧の達者である。木姿と別人であるかも知れない。

神無月の中の七日、公の事により生野という所にまかる。伴へる者は三人、四人、その中に孤舟ひとり我好ける道（俳諧）の友なるもうれし。暁かけて宿を出るとて、

朝霜にわらぢ踏みしめる首途哉　　孤舟

とそそのかしければ、

ほう髭は霜にいたむや朝嵐　　髭風

駕籠の窓から白き茶の花　　孤舟

以下、紀行文中の孤舟の句を示す。

木枯しや脇目もふらず馬の上

銀をふくけぶりはぬくし里の冬

日かげさす障子や蠅の冬籠り

次に、やゝおくれて**鳥井素菊**がある。素菊は通称・糀屋忠左衛門、久保町名主を勤めたが、その日記の中で（文政七年一月十八日）次のようにいっている（意訳）。

自分は若いころ少々俳諧に遊んだが、よくよく世上のありさまを見ると俳諧に遊んだ家は十中八九家業がおろそかになり、もの知り顔に自分をたかぶり人を見下し、いたって人柄が悪くなり、終には身上の障りとなりがちであるので、はたち過ぎのころから俳諧に遊ぶことはやめている。もっとも、懇意の方へ吉凶について遣わす発句は今でもしているが、これは家事の妨げにもならない。俳人となる事は、子々孫々まで無用の事として心得るべきである。

このころは、蝶夢直門の俳人たちの子息の代に当たり、一般に俳諧が遊びに堕してきた時期でもあった。なお、右の文にいうように、素菊の慶弔の句は日記の随所に散見するので、その二、三を示す。

中田立慶老隠居御聞済の由

月雪も寝ころびて見ん冬ごもり

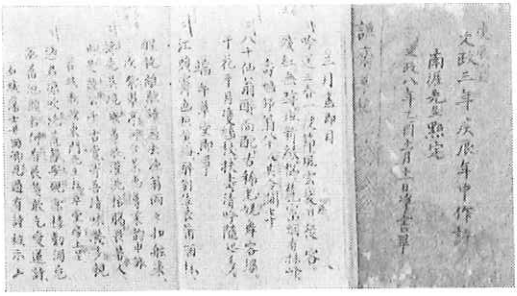
大石摂津守殿本卦賀、併て小田井社御鎮座二千年大神事被二執行一の由

二千とせ社頭はさびてもとの春

第三節　漢詩を詠じた人たち

福井謙斎

福井謙斎（一七五二～一八三一）は宵田町の富商で、通称を丹後屋八郎左衛門といい、家業・公用のかたわら東皐と号して俳諧にも通じていたことは、前節で述べたとおりである。漢詩は少壮のころ京都の岡田南涯に学び、『漫吟』（前後編）を著わしたという。『但馬吟詠集』（橋本簸谿）にも数編を見るが、『南涯先生点定・燕韵草稿（自文政三年至同七年）』（豊中市・八木忠雄氏蔵）によると、勤王家・今井君紀、画家・渡辺竹庵、藩学教授・中田公国、歌人俳人・南条鶯橋、俳人医師・由利柚蓮、歌人・由利予端などを文雅の友とし、藩執政・阪本南溪、舟木子新など好学の上士との交友がうかがわれる。



写315　福井謙斎の漢詩集　京都の岡田南涯の添削をうけている。（豊中市・八木忠雄氏蔵）

遺吟二首を掲げる。

夏日晩涼

残蝶狂飛迷夕照
帰鴉栖定占涼風
眼前無不真詩国
清興増加晩酌中

夏日晩涼

残蝶狂飛し夕照に迷う
帰鴉栖定まりて涼風を占む
眼前真に詩国ならざるはなく
清興増加す晩酌の中

観北海漁火
暮色滄溟望不分
波濤鼓岸響殷殷
百千漁艇燃篝処
界断水天一様雲

北海の漁火を観る
暮色滄溟望分かたず
波濤岸を鼓ちて響殷殷
百千の漁艇篝を燃やすところ
界断水天一様の雲

渡辺竹庵や今井君紀（成績）も詩を賦したようであるが、その作が伝わっていない。その他、豊岡藩士中で、『豊岡誌』によって遺作のある者二、三について述べる。

岸田丹山　岸田丹山（文化十一年・〔一八一四〕十二月没・六五歳）は、名は晋、字は子済、五禽道人と号した。代々藩医を勤め、丹山もその後を継いで医術に優れていた。また、書をよくし詩に巧みであった。大いに志を伸ばそうとして、少壮のころ官を辞し、四方に遊んで交友を広め、研鑽に努めた。出郷に際して志をうたった漢詩一首が遺っている。

狼虎相追誰後先
回頭天日没虞淵
屈伸有命君休憾
赫赫英名五百年

狼虎相追う誰か後先
頭を回せば天日虞淵に没す
屈伸命有り君憾むことを休めよ
赫赫たる英名五百年

その後、多年刻苦の末、中国古代の名医・華佗の唱えた「五禽の術」（手足や体軀を動かして血行をよくする養生法で、今の体操に当たる）を会得して医名を高め後、郷里に帰った。

文化四年（一八〇七）に幕府の儒臣・柴野栗山が城崎来遊の際、水明楼に会して詩の唱和を行なっているが、この時に栗山は「五禽の術」を称えた詩を与えている。そのほか、京都の医儒・今枝世顕、九州の儒家・亀井南溟・昭陽父子、山陽の父・頼春水らが、それぞれ丹山を称揚して贈った詩文がある。そのうち春水のもの一首を示す。

贈岸田丹山　　岸田丹山に贈る

山水於君助有神　　山水、君を助くるに神有り

九州遊遍自由身　　九州遊遍す自由の身

帰郷揮筆人当嘆　　郷に帰りて筆を揮う人まさに嘆ずべく

不是従前岸老人　　これ従前の岸老人にあらず

阪本南溪　　阪本南溪（天保七年没）は、名は守清、字は仲廉（なかかど）、知足軒とも号した。通称を愛之助といい、晩年に弥三左衛門と改めた。豊岡藩士として明和四年（一七六七）に藩侯に従って出府し、奥詰となった。明和七年（一七七〇）には家督を継ぎ、才幹を認められて累進し、天明六年（一七八六）には加判役（執政）に挙げられ、文政二年（一八一九）致仕した。南溪は公務のかたわら、漢籍を修め、漢詩をよくした。町方の福井謙斎らとも文学を通じて親しく交わった。遺作の多くは伝わらず、次の一首と高屋焼開窯記念皿に書かれた七言絶句の一首（本編第六章第七節）を見るのみである。

東門先生不相見十四年、　　東門先生を相見ざる十四年、

今日適見訪喜贈呈　　今日適訪（たまたま）れを見て喜びて贈呈す

老夫雖非昔日看
相逢先喜各平安
勧君吾有一壺酒
酔罄交歓至夜闌

老夫昔日の看にあらずといえども
相逢うて先ず喜ぶ各の平安
君に勧むる吾に一壺酒有り
酔うて交歓をつくし夜闌に至る

（注、東門は桜井氏、出石藩の儒官）

中田公国　中田公国（一七九六～一八五八）は名は立慶、字は世香、寄傲また三栗・雲石・秋斎・明遠書房などと号した。播磨国多可郡・篠原氏の出で、豊岡藩医・中田氏に養われ後、その家を継ぐ。学徳優れ、天保年中に藩学・稽古堂の学長に推され、朱子学を講じた。弘化元年（一八四四）に養父の職を襲って藩医を兼ねた。ついで、海岸防禦筆談官をも兼ねる。詩をよくし、福井謙斎・今井君紀らと親交あり、遺作数首のうち、一編を掲げる。（『豊岡誌』によれば、公国は立慶の他、立卿、また立馨とも綴るという）。

題今井君紀芳野笛

花香月色得無魂
万口一辞斉告寃
留跡龍吟火余竹
明分王室半乾坤

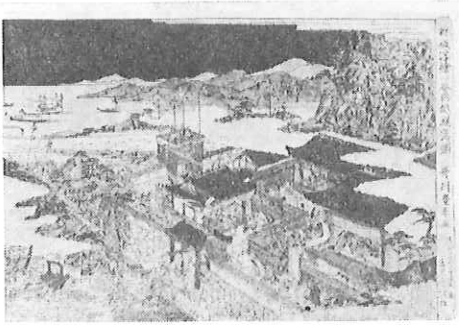
今井君紀の芳野笛に題す

花香月色魂無きを得る
万口一辞斉しく寃を告ぐ
跡を留む龍吟火余の竹
明分王室半ば乾坤

第四節　郷土にゆかりの画家たち

浮世絵師・豊春と戴斗

歌川豊春（一七三五～一八一四）は、名は昌樹、俗称を但馬屋庄次郎といい後、新右衛門と改めた。一竜斎・潜竜斎・松爾楼などと号し、江戸末期に浮世絵界の最大主流となった歌川派の祖である。豊岡の本町に生まれ（一説に豊後国臼杵の出生ともいう）、京都に出て狩野派の絵師・鶴沢探鯨（狩野探幽の門人・探山の子）に画技を学び、後（明和の初めごろ）に江戸に下って、鳥山石燕・石川豊信らについて浮世絵を学んで、歌川派を開いた。

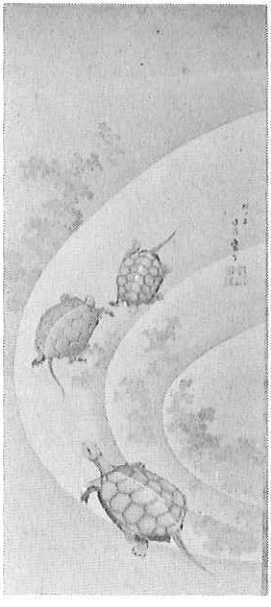


写316　歌川豊春の木版浮き絵「一の谷逆落しの図」（京極高光氏蔵）

豊春は構図に巧みで、色彩感覚にすぐれ、描線にも秀でていた。美人画や役者絵も描き、特にその肉筆画は狩野派を修業しただけあって優れているといわれ、寛政年間の日光廟補修の際に、その手腕を買われて参加したという。

しかし、その画業の最大の特徴は風景版画に西洋画の遠近法・陰影法を取り入れて、いわゆる浮絵の画期的進歩に貢献したことである。豊春の浮絵は、オランダ銅版の模刻から始まり、江戸名所など日本の風景画の製作まで達したが、その洋風の風景版画は新奇を好む江戸の町人に歓迎され、後の写実的風景画の隆盛を招来した。

写318　葛飾戴斗の絵　2（舟木直温氏蔵）



写317　葛飾戴斗の絵　1
（京極高光氏蔵）

その代表作には「紅毛（オランダ）フランカイノ湊（みなと）万里鏡響図（ベニス風景）」「浅草金竜山開帳之図」「新吉原惣仕舞之図」「洛陽四条河原夕涼図」などがある。

なお、その門下から豊広・豊国という双璧（そうへき）の大才を出し、後の歌川派隆盛の基を築いたことも功績の一つといえる。このように豊春は、わが国の絵画史に大きな足跡を残して文化十一年、七九歳で没した。

葛飾戴斗（かつしかたいと）は、「富嶽百景」などで有名な浮世絵師・葛飾北斎の高弟で、豊岡藩士で俗称を近藤伴右衛門、字は文雄、米華と号した。もと信州・松本藩に仕えていたが生来、画を好み、致仕して江戸に出て葛飾北斎に学び、斗円楼北泉と号した。

豊岡藩主・京極高有がその画才を愛して召抱え、俗務勤役を免じて画業一筋に専念させた。その知遇に感じて北泉は日夜精進して腕をみがき、文政三年（一八二〇）に師の北斎からその別号・戴斗を譲られ、二代目・戴斗となった。それより画名大いに上がり、同門の高足・魚屋（ととや）北溪と並び称せられた。その画風は師の北斎に酷似（こくじ）し、識別し難いものも多いという。別号に洞庭舎・昇山・玄竜斎・米華

山人などがあり、篆書を好んで画中に書き添えた作品が多い。代表作に「月夜の山水」「鯉魚図」などの作があり、北斎晩年の武者絵を継いだ「武者鐘」「二十四孝図会」「絵本通俗三国志」などの絵本のほか、「小紋雛形」「花鳥画伝」「戴斗画譜」などがある。

嘉永三年（一八五〇）に病没、その墓は市内三坂の旧・瑞泰寺墓地にあり、碑文中に「北斎二世葛飾戴斗・俗称伴右衛門」とある。

南画派の画家

渡辺竹庵（一七七四～一八二三）は九日市の人で俗称・幸右衛門、先代・七郎左衛門の後を継いで大庄屋を勤めた。字は士保、竹庵はその号であるが、別に闘韮堂または黄華とも号し、諱を清胤という。後年、城崎の画家・斎藤崎庵と並んで「但馬二庵」と称せられた。若年より書を読み、画を好み、風雅を愛した。画は初め土佐派の浜田杏堂に学んだが、中途にして唐ぶり（中国風の南画）に転じ後、帰郷して邸の後園に小庵を建て、役職のかたわら草木の写生に専念して、その筆端妙をきわめたという。福井髭風は『竹庵記』（文政二年）に、竹庵を訪ねた時のようすを、次のように書いている。

やがて後園の小室に伴ひて盃を持ち出で鮒のあつもの（吸物）に酒を勧む。その構、わづかに筵二枚に過ぎず、聊の蔀をあげ、炉を切り、もはら寒さをいとふの備へのみ。窓形障子の模様まで、皆

写319　渡辺竹庵自画像
（尼崎市・太田正治郎氏蔵）

李笠翁が昔の物好きにならひ、異国の風情を尽くせり。その興に乗じて共に酔うて閑談をなす。かたはらなる机の上にありし小冊を取出て与ふるを見れば、二三子が金玉の言葉に真名序を書き、鳴鶴集と題して、唐歌（漢詩）・大和歌・国文俳諧の句など記せる小集なり。おのれにも一筆を添へよと責む。かかる知る知らぬ諸風子の言葉に交を結ぶ事も、一ふしの風流ならめと、老が拙きすさびを恥ぢず一句を述べて責をふさぐ。

諸声に鶴の舞ひけり野の錦　　髭風

竹庵は絵を描くだけでなく、漢籍に通じ、詩を賦し和歌を詠じ、酒を愛する洒脱な人物であったようで、前記の文にみるように交友関係も広く、美濃の村瀬藤城・大坂の篠崎小竹・出石の桜井東門など遠近の漢学者のほか、豊岡藩の舟木直寅・姫路藩の河合某（いずれも藩の家老級の人物）などの上層の武家との交際もあった。文政六年六月、四九歳で没した。

写320　渡辺竹庵の絵　（尼崎市・太田正治郎氏蔵）

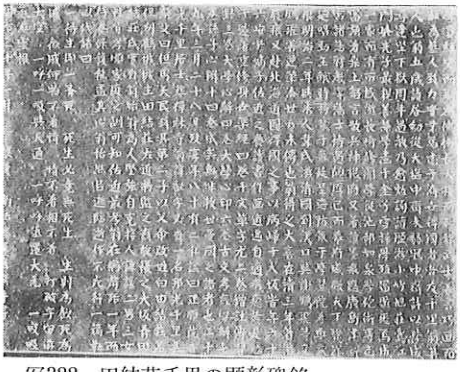
小場瀬文錦は通称を与兵衛といい代々、呉服商を営む家に生まれた。幼少より画をたしなみ画技に長け、京都の円山派の画家・塩川文麟に学び後、中国明代の画を好んでその画法にならい、家業のかたわら絵筆をとって精進した。明治の初め、京都の南画家・田能村直入（一八一四～一九〇四）が当地に来遊したとき、その所説を聴いて得るところあり、直入に師事してさらに研鑽につとめ、画境大いに進んだ。明治十七年、文錦は自分の作品をたずさえて京都に赴き、南画の大家・富岡鉄斎（一八三六～一九二四）を訪ねて批評を請うた。鉄

斎はその絵を観て激賞し以後、画家・文錦の名が世に知られるようになったという。

田結荘千里（一八一五～一八九六）は田結庄氏の子孫といわれ、名は斎治、字を必香または邦光といい、但馬千里とも号した。父は城崎郡山本村（田鶴野地区）の出身で大坂堂島の儒医・天民とされているが実は、天民の弟・天造（知恩院門跡の坊官・大田垣光古の養子となり、望古と改名した）と幕末の著名な女流歌人・蓮月尼との間の子であるという。望古は光古の養女・誠（後の蓮月）の婿養子となって一男二女をもうけたが、いずれも夭折し、その後、故あって離婚し実兄の天民のもとに身を寄せた。その時、生後間もない男子を連れて帰り、ほどなく病没した（文化十二年）ので、その子は伯父・天民の子として育てられた。それが千里だというのである。

写321　小場瀬文錦の絵馬　（日吉神社蔵）

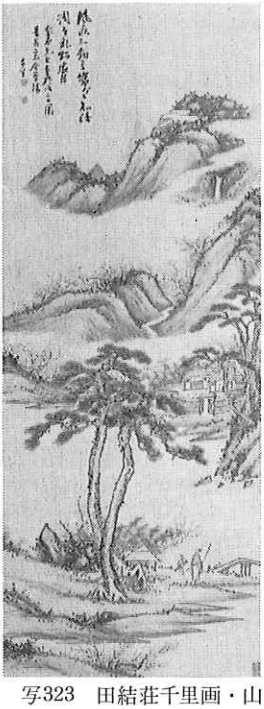
千里は、幼名を不動次郎といい、五歳で読書を始め九歳の時、漢学者・篠崎小竹の門に入り十二歳の時、大塩平八郎の家塾に学んだ。学力抜群のため十八歳で師に勧められて自ら家塾を開いたが、天保八年に師・大塩平八郎の乱に連座して投獄された。二二歳の時である。後、許されて出獄後、斎藤鶯江・広瀬旭荘・藤沢東畡の諸家について詩文を修め、南画を大坂の金子雪操・長崎の木下逸雲に学んだ。研鑽数年にして一家をなすに至ったが、三〇歳のころ、一転して「筆墨の間に生を終えるは男子の道ではない。よろしく国事に奔走すべきだ」と長崎に赴き、高島秋帆に就いて西洋砲術を会得し、帰坂して緒方洪庵に理学を学び、たちまち弾道測法の大家とな



写322　田結荘千里の顕彰碑銘
（明治30年・藤沢南岳撰）

った。折から広島・津・新宮の諸藩に招かれてその技法を伝え、また四方に奔走して勤王を唱え海防を説いた。

しかし、三八歳の時に時勢を洞察して砲術を捨て、文久から慶応の間には富国産業を唱えて諸藩に遊説した。



写323　田結荘千里画・山水図
（城崎町・西村四郎氏蔵）

維新後の明治二年に単身、中国大陸に渡って各地を遊歴し、帰国するや汽船を買入れて北海道・樺太・千島などを探訪して北海漁業を開拓した。明治十二年、六六歳の時、北海の氷上で転倒、骨折したのを機に大阪に帰り以後、書を読み、絵を描き、自適の余生を送って、明治二十九年に八一歳で没した。

田結荘千里はもとより一介の文人画家ではなく、いわゆる国士的人物で、絵についても「絵画を以て一片の芸能とせず、養性修情の要具とする」といっているだけに、その絵は筆力するどく気勢があふれて伸びやかさがあり、しかも典雅の趣をもつといわれている。千里には「血涙痕」「遊屐痕」など数多くの著書がある（田結荘千里顕彰碑銘・杉本『太田垣蓮月』・その他による）。